学位論文題名

人類史における「音」の文化の考古学的研究

－日本列島から出土した音響発生器具を対象として－

学位論文内容の要旨

本論文は、音と人類との関わりの歴史を、音の文化制度化という観点から人類史の中で再構成することを試みたものである。人類が音響発生器具という道具を作り用いて、自然界に存在する音を人工的な音へと作り変え、操作することによって、新たな社会的関係を生み出してきた過程を、日本列島で展開した特色ある人類文化である弥生・古墳両文化における具体的な考古資料を分析対象として取り扱い、考察している。「音楽」以前・「楽器」以前を考察対象とするために、「音」の考古学、「音響発生器具」という用語を準備し、研究を進める点に特色がある。研究の方法としては考古学研究の基本的な方法である、資料批判・対象資料の集成・編年・分布論的検討・機能論的検討・出土状態の分析といった手堅い手法が用いられている。

序論では、音楽以前・楽器以前の「音」の文化を取り扱うための方法的構想として、文化制度としての「音」と「音響発生器具」という新たな用語を提起し使用することの有効性が議論される。そして、特定の人類文化における考古資料を分析対象としながらも、個別具体的な歴史的解釈としてのみで終わらせるのではなくて、その結果を人類史のなかに位置付けて評価することの意義が論じられる。

第一章では、日本音楽の起源に関する学史的な整理が行なわれ、その問題点を明らかにするとともに「音」の考古学というアプローチの必要性が議論される。また問題点の整理を踏まえて、楽器以前の音響発生器具として気鳴系・打鳴系・絃鳴系の基本的な3大別を用いることの有効性を提示し、次章以下では気鳴系音響発生器具として^{けん*}埴形土製品（※埴は「土笛」の意）を、打鳴系音響発生器具として小銅鐸を、絃鳴系音響発生器具として篋形木製品及び琴形木製品を、それぞれ分析対象として取り扱うことが示される。

第二章では埴形土製品が気鳴系音響発生器具として認定しうるか否かの検討がなされる。埴形土製品は古代中国の^{とうけん}陶埴に類似した形態であることから命名された用語であり、「弥生の土笛」として吹奏楽器であると評価されることが多かった考古資料である。まず、集成に続く編年及び分布論的検討で、弥生文化前期前半に出現して、中期には衰退・消滅すること、分布は日本海側を中心として北部九州から丹後半島までの限られた範囲であることが明らかにされる。また、その構造的特性から気鳴系音響発生器具であることが否定され、よって古代中国の陶埴がそのモデルになったという見解（大陸渡来説）が否定される。

そのプロト・タイプの可能性が最も高いものとして漂着ココヤシの模倣品が検討され、列島独自の製品であるという結論に達する。このように気鳴系音響発生器具に関しては、前代の縄文文化の「中空土製品」についても気鳴系音響発生器具であることに否定的な研究成果が既にあげられており、よって日本列島では気鳴系音響発生器具としての自発的な展開は認められず、その存在が明確になるのは古墳文化中期中葉の木製や竹製の「笛」からであり、それも大陸文化から伝えられた可能性が高いことが論じられる。

第三章では、従来「小銅鐸」として認識されてきた一部のものが、打鳴系音響発生器具である小型青銅製ベルとして認定される。まず、「小銅鐸」という用語をもって指し示される対象が複合的であり、銅鐸のミニチュアである「銅鐸小型品」と、構造的特性から音響発生器具の可能性が高い「小型青銅製ベル」とに区分しうることが論じられる。この区分に基づく集成、編年、分布論的検討によって、小型青銅製ベルの原型は大陸から伝来したものであり、日本列島においては弥生中期に北九州と近畿で出現し、西日本一帯に分布を広げた後、古墳前期に至り関東地方に分布の中心を移動して、やがて消滅する過程が明らかにされる。また、遺跡での出土状態の分析が行われ、小型青銅製ベルが葬送儀礼の場面で葬送の執行者によって鳴らされた状況が復原される。小型青銅製ベルは古墳前期には終焉をむかえ、古墳中期以降にはそれに代わって「鈴」が普及し、ここに列島における打鳴系音響発生器具の一つの転換点が見出される。

第四章では従来「筥形木製品」、また「琴形木製品」として別々に取り扱われてきた考古資料を、「筥形 - 琴形木製品」という概念を提起することによって同一基準で分析することの重要性が指摘される。その上でこれらの資料群がⅠ類（剣身型・板作り型）、Ⅱ類（棒作り型）、Ⅲ類（槽作り=箱作り型・甲作り型）に分類され、従来琴形木製品として取り扱われてきたものが、Ⅰ類（板作り型）とⅢ類であることを明らかにする。また、集成・分類された資料群全体について編年・分布論的検討がなされ、Ⅰ類（剣身型）については縄文後・晩期から弥生後期前半までの、Ⅱ類については弥生中期から古墳後期までの、Ⅰ（板作り型）及びⅢ類については弥生前期末から古墳後期まで続いて和琴へと発展する、それぞれの編年的な関係を明らかにする。Ⅰ類（剣身型）については従来「織具説」が唱えられていたが、構造的特徴と使用痕の分析から織具説を否定し、「弦楽器説」を（ただし弦楽器ではなくて絃鳴系音響発生器具として）支持することが示される。Ⅱ類（棒作り型）は、古代中国の弦楽器「筑」との関連性が従来指摘されてきた「筥形木製品」に該当するものである。上記の編年・分布論的検討・構造的特性の検討によって、中国古代楽器「筑」との関連性が否定され、日本列島で独自に展開した絃鳴系音響発生器具であることが論じられる。その起源・系統性に関しては不明とされるが、Ⅰ類（剣身型）との連続性は否定され、古墳前期末から中期にかけてもっとも盛行し、大型化・儀器化を遂げる過程が復原される。以上の検討の結果、古墳文化には系統を異にする複数の絃鳴系音響発生器具が存在していたが、奈良時代以降へと引き継がれるものはⅢ類であることが明らかにされる。

第五章では、前章までに取り扱ってきた埴形土製品、小銅鐸、筥形 - 琴形木製品に関する検討結果が総合的に評価される。埴形土製品は音響発生器具であることが否定されたために、日本列島においては縄文文化以来、弥生文化の段階までは、明確な規格性をもった

気鳴系音響発生器具が発達しなかった状況が明らかにされる。打鳴系音響発生器具としては弥生文化における銅鐸と小型青銅製ベルの存在が明らかにされる。共に(1)プロト・タイプとなるものが大陸側に求められるが、(2)機能・用途が異なること、(3)日本列島における拡散・分布の仕方にも大きな隔りがあること、(4)古墳文化に至り急速に廃止されたこと、が確認される。絃鳴系音響発生器具としては篋形木製品(I類〔剣身型〕)のみが縄文文化において自生的なものであるが、弥生文化以降、それが系統的に発展することではなく、新たに登場する絃鳴系音響発生器具である筑形木製品との間には系統的な関係は認められず、筑形木製品は古墳後期まで存続して使用された状況が明らかにされる。筑形木製品は大型化・儀器化して古墳後期に廃止されるが、これと対照的なのが大陸側に系譜が求められる琴形木製品(Ⅲ類及びⅠ類〔板作り型〕)であり、奈良時代以降における和琴の原型となってゆく。楽器成立以前の音響発生器具の社会的な受容のあり方に上記のような差異が生じた原因として、音響発生器具を取り込んだ儀礼過程が、弥生文化と古墳文化といったそれぞれの社会状況における政治的機構への取り込まれ方の程度に関連することが推察される。

学位論文審査の要旨

主 査 准教授 小 杉 康
副 査 准教授 加 藤 博 文
副 査 教 授 南 部 昇

学 位 論 文 題 名

人類史における「音」の文化の考古学的研究

－日本列島から出土した音響発生器具を対象として－

平成 19 年 12 月 14 日文学研究科教授会の承認のもと、上記 3 名をもって本論文の審査委員会を組織し、口述試験を含め計 5 回の審査を行った。

- 平成 19 年 12 月 14 日 第一回審査委員会
申請論文の複写を各審査委員に配布し、概要・体裁の確認、今後の審査日程の調整をおこなう。
- 平成 20 年 1 月 21 日 第二回審査委員会
論文内容の検討と問題点の整理を行い、口述試験の進め方を決める。
- 平成 20 年 1 月 30 日 第三回審査委員会
口述試験を実施する。
- 平成 20 年 1 月 30 日 第四回審査委員会
口述試験の内容を検討し、問題点の整理と評価をおこない、学位授与を判定する。
- 平成 20 年 2 月 14 日 第五回審査委員会
審査結果報告書原案を主査が準備し、それを各委員が検討し、合議のうえ加筆訂正をおこない、最終案を作成する。

以下に、本論文の評価を述べる。

本論文は、これまで個別の研究テーマとして取り扱われてきた考古資料（埴形土製品、小銅鐸、篋形木製品、琴形木製品）を「音」の考古学という新しい研究の枠組を導入することによって包括的に取り扱い、人類史における「音」の文化制度化という新しい問題系を提示したことをもって、その第一の特色とすることができ、自ら新たに切り開いたその分野において一つの展望を示し得た点で高く評価できるものである。具体的な分析においては、まず慣用的に使用されることの多い考古学的概念（用語）を反省的に捉え直し、新

たに再定義することによって問題点を明確化する手法と、集成・編年・分布論的検討といったきわめてオーソドックスな手法との組合せによって、ここで取り扱った各種の考古資料に対して、従来のそれぞれの研究成果をより精度の高い確実なものにした点において、個々の評価を獲得している。特に、埴形土製品が気鳴系音響発生器具でない点、篋形木製品と筑形木製品とが絃鳴系音響発生器具である点に結論を導けたことが、今後この方面での議論を活性化することになるであろう。

ここで取り扱った各種の考古資料の編年的結果・機能論的結果を弥生文化や古墳文化における社会的文脈の中で評価・議論する点は秀逸であるが、しかしながらその堅実な手法がかえって野心的な研究の枠組である「音」の考古学あるいは人類史における「音」の文化制度化というパースペクティブのなかで個々の結果を再構成する試みを阻害してしまっている側面も指摘できる。弥生・古墳文化段階の日本列島を考察対象とするのであれば、高文明との近接地域にあつて、そこから完成された「楽器」として導入された可能性がありながらも、それを自文化の独自の儀礼体系や価値体系へと取り込むことによって変容させ、特定の「楽制」から切り離して音響発生器具として再生する過程を議論することが可能であり、必要であつたはずである。しかし、この点は学位請求論文としての本論文の価値を決定的に損なうものではなく、むしろ今後にかかれた具体的な研究課題として積極的に評価することができる。

以上の審査結果に基づき、本審査委員会は全員一致して本申請論文が博士（文学）の学位を授与されるのに妥当であるとの結論に達した。